

新型コロナ 今も慎重に身を守る人たちの苦しみ

2022年11月14日 谷口恭・太融寺町谷口医院院長 毎日新聞



飾りをつけた曳山（山車）をひく催し「宵曳山」を前に、感染の有無を確認するため自主的に検査を受ける、曳山「源義経の兜」の曳き子たち＝佐賀県唐津市で2022年11月2日午後4時27分、峰下喜之撮影

ついこの間までの「ソーシャルディスタンス」「黙食」「オンライン講義」などが遠い昔であるかのように、“日常”が戻ってきています。時間と場所によっては、街を歩く人の大半がマスクをしていない光景も増えてきました。バイデン米大統領が発言したような「(新型コロナウイルス感染症の)パンデミック(世界的大流行)は終わった」という声は日本の政治家や官僚からは聞かれませんが、すでにこの国でも「新型コロナは過去のもの」と考える人は確実に増えています。ですが、そのようなムードだからこそ新型コロナを恐れている人も少なからずいます。今回は、そういった人たちが現状をどのようにとらえているか、といったことを含め「ポストコロナの問題点」を、私見を交えて述べたいと思います。

まずは「**新型コロナがどれだけ軽症化したか**」をデータで確認していきましょう。表は、大阪府における第1波から第7波の年代別の死亡率を推計したものです。

◇死亡は1000人に1人になった

まず、注目すべきは第1波と第4波の死亡率、特に70代以上の死亡率です。それぞれ22.0%、15.6%と極めて高い死亡率を示しています。第1波よりも第4波の死亡率の方が低くなっていますが、人数で見れば、第1波、第4波の死亡者数はそれぞれ、72人、1308人です。大阪府では第4波で医療崩壊が起きました。

ところが、第7波では70代以上の死亡者数が915人と少なくない数字にみえますが、これは陽性者が9万246人と激増したため、死亡率で見るとわずか1.01%です。総計（全年齢）での死亡率は0.10%です。つまり、大阪府の第7波の総括としては「70代以上では100人に1人が、全年齢では1000人に1人が死亡する病気」となります。

この数字をどうとらえるかには個人差があるでしょうが、診察室でたくさんの患者さんにこの数字を伝えている私の印象でいえば、大半の人が「最近の新型コロナは軽症」、あるいは（バイデン大統領が言ったように）「新型コロナは終わった」といったコメントをされます。

「もうワクチンは終わりにします」

私が診察室でこういった第7波の死亡率の話をするのは、たいてい患者さんからワクチンの追加接種に関する質問を受けたときです。最近は、「もうワクチンは終わりにします」と言って追加接種（4回目あるいは5回目）を見合わせる人が大半を占めるようになりました。この傾向は小児で顕著で、ワクチンを希望する18歳未満の男子女子は激減しています。6か月から4歳の乳幼児で言えば、法律上は「努力義務」であるにもかかわらず、谷口医院ではいまだに「打たせませ」と答えた保護者は一人もいません。

マスクを考えてみましょう。現在、マスクを着用すべき条件は以前より緩和されました。厚生労働省は「屋外では着用不要、屋内では（他者がいれば）着用」と呼びかけています。

マスクが感染の広がりを防ぐというエビデンス（医学的証拠）は多数あるのですが、反マスク派の人たちは、「効果がなかった」とする小規模調査を持ち出して、屋内でもマスクを着用しようとしません。なお、マスクの有効性を検証するには、適正に行われた複数の調査を改めて分析しなおす「メタアナリシス」という研究方法が有効です。そのメタアナリシスによって、マスクの有効性を検証した研究で、有名な論文が、2021年1月と21年7月に公表されました。最初の論文は「マスクによって感染リスクが88%低下する」、次の論文は同じく「62%低下する」と結論づけています。

マスク反対派の人たちはその“思想”を強く主張しすぎるあまり、社会的な「分断」を招いています。なかには「マスクをつけている方のご入店は遠慮させていただきます」という案内を掲示している飲食店もあるとか。なんと、マスクをしているだけで入店拒否されるというのです。もっとも、海外でもこのような行動は珍しくなく、米テキサス州では21年9月に、「マスクを着用していた」という理由でレストランから追い出されたカップルの報道がありました。

さて、ワクチン接種を受けなくなり、マスクをはずすようになり、新型コロナの予防対策をする人たちをさげすむ声が大きくなればこの社会に何が起こるのでしょうか。それは、依然として新型コロナに慎重な人たちに対する“差別”です。

差別を論じる前に、どのような人たちが「**新型コロナに依然慎重**」なのかを振り返ってみましょう。それは、本連載でも何度か指摘しているように、「**高齢者**」と「**免疫能が低下している人**」です。



マスク姿で街を行き交う人たち＝東京都渋谷区で2022年9月21日、手塚耕一郎撮影

孫から感染しても悔いはない

私の経験でいえば、高齢者は（全員ではないにせよ）“運命”を受け入れ達観している人が少なくありません。谷口医院の事例でいえば、第7波でコロナに感染した高齢者の大半は家族内感染でした。同居する、あるいは遊びに来た、子供や孫から感染というケースも目立ちました。感染していない人も含めて、高齢の患者さんがよく言われるのが「孫から感染してコロナで死んでも悔いはない」という言葉です。ある研究では、新型コロナに感染した0～4歳児の4割（19人中7人）は無症状でした。無症状の孫から感染したくなければ会うことをあきらめなければならぬわけですから、「感染を受け入れる」という選択をする人が多いのはもっともなのでしょう。

免疫能が下がっている人は

一方、「免疫能が低下している人」（及びその家族）はそういうわけにはいきません。なかには“運命”として自身の感染を受け入れられる人もいるかもしれませんが、彼ら、彼女らには若い世代も多く、小さなお子さんをお持ちの方も少なくありません。日ごろは、健常者とほとんど変わらない生活をしていますから他人からは気付かれません。具体的な病名としては、悪性腫瘍（がん）、自己免疫疾患、腎不全、（重度の）糖尿病、HIV（エイズウイルス）陽性者（でコントロール不良の人）などです。こうした人たちは、病名の公表で社会的に不利益を被ることがあり、職場などでは伏せていることも多いのです。

そんな彼ら、彼女らが、コロナは「終わった」というムードのなか、マスクを外しワクチン接種を受けないことを堂々と宣言する人たちに囲まればどのような気持ちになるでしょうか。食事会などの誘いを断らねばならず、集団行事に参加できず、ひどい場合は「いつまでコロナコロナって言ってるの？」とばかにされることもあるかもしれません。



自衛隊が運営する東京の大規模接種会場でオミクロン株対応のワクチン接種を受ける男性＝東京都千代田区で2022年10月3日午後4時12分、長谷川直亮撮影

「まだ新型コロナ対策中」の人たち

実際、米国ではすでにそのような現象が生じています。米国でも、依然、新型コロナを恐怖に感じている人たちがいます。彼（女）らは自分たちのことを「Still COVIDing（まだ新型コロナ対策中）」と呼び、SNSなどでグループをつくり、安全に過ごすための情報交換をしています。米紙ワシントン・ポストの記事によると、同紙の取材に答えたある女性は「マスクを着用させた子供と外を歩いていると、通りかかった人が女性の方を向き、攻撃的にせきをするふりをした」と話しました。

同紙が紹介している米モンマス大学の世論調査によると「家族がコロナで重症化することを心配している」という回答者は22年9月には22%でした。これは21年9月の45%から大きく低下しています。また「マスクの義務化と社会的距離のガイドラインを支持する」のは25%で、1年前の63%から大きく減少しました。

米国では、医療従事者（の一部）も新型コロナを「過去のもの」とみなしているようです。「Still COVIDing」のあるグループは、まだマスクを着用している獣医師や眼科医、オンライン上でケアをしてくれる作業療法士などについて情報交換をしています。同紙には「歯科医師10人に電話して、まだマスクをしているという人は1人だ」と嘆く女性も登場します。

新たな差別が心配

新型コロナが軽症化し、コロナ前の世界を取り戻しつつある現況は歓迎すべきですが、そのせいでかえって孤立し、被差別感で苦しむ人たちがいることを忘れてはいけません。改めて考えてみると、新型コロナというこの病気には、初めから「差別」がつきまとい続けています。初めは海外からの帰国者や感染者への差別、次いでダイヤモンド・プリンセス号に乗り込んだ医療者やその家族への差別、さらには母親が病院勤務というだけで幼稚

園や学校で差別を受けた子供たち。そして現在新たな差別の対象となろうとしているのが「免疫能低下などの理由からこれまで通りの予防対策を講じる人たち」です。

最後に、20年4月9日に糸井重里さんがTwitterに投稿された名言を紹介します。わかったことがある。新型コロナウイルスのことばかり聞いているのがつらいのではなかった。ずっと、誰かが誰かを責め立てている。これを感じるのがつらいのだ。